

はじめに

本書の大きな目的は、コンパニオン・アニマル〔伴侶動物〕としてのイヌについて、そして彼らとのコミュニケーションのとり方について、よりいっそう理解を深めることにある。あなたのイヌが何を感じ、何をしようとし、何を望んでいるのか——。この本を読めば、そうした「イヌの言葉」がいまよりもすんなりとわかるようになるだろう。そうするとイヌも、あなたとのコミュニケーションが楽になり、遊びたいとき、何かに苦しんでいるとき、あなたの注意を引きたいとき、病気かもしれないとき、それを伝えやすくなるはずだ。

人と動物とのきずなは、動物に対する理解とコミュニケーションを改善することでしか強くできないわけではなく、良質な世話によっても強化することができる。本書では、まさにこの良質な世話に求められるものについて書いた。ここで扱うのは、コンパニオン・アニマルの世話と予防医学に関する、ホリスティックなアプローチ〔部分だけで論じるのではなく、全体的に捉えようとする手法〕である。それは、動物の健康と幸福、飼い主とイヌとの健全で幸せなきずなを築くうえで役立つはずだ。

多くの人——子どもや、とくに孤独な人や年配者——にとってコンパニオン・アニマルとのきずなは、人生のなかで経験するもっとも深い結びつきの一つとなっている。長いあいだ、わたしはこの事実に感

動させられてきた。それは、獣医および動物行動療法士としての助言を求めてたずねてきた大勢の人の相談に応じていくなかで経験したことだった。わたしは、こうした動物の福祉にかかわる仕事に携わり、国内外のイヌの健康と福祉の向上を目的とした基本的な処置（なかにはずっと実現できずにいるものもある）を提供してきた。本書では、そうした国境を越える仕事をおして得られた知識や洞察、気がかりなこともまとめた。何といってもイヌは、世界中の人々と、その数え切れないほどの家族にとって、大切にかけがえのない存在なのだ。

かつてわたしたちの祖先が、自然や野生動物、家畜といまよりもっと深くかかわり合いながら暮らしていたころ、動物は人間に語りかけ、神的または霊的な領域で知恵を共有し、わたしたちとつながっていると考えられていた。動物は人々を保護し、教え、癒す存在になっていたのである——だが、そのためには、動物と交わる人々の心が開かれていなければならなかった。

こんにち、動物のもつ力をふたたび見いだし、古の知恵を甦いじらせようとしている。このルネサンスというべきものによって、わたしたちの心は開かれようとしている。これは、家族として、遊び仲間として、よき友として、わたしたちの生活を豊かにしてくれるたくさんイヌがいてくれるおかげだ。動物はじつに多くのものを与えてくれるのだ。

大勢の人にとって、野生のものと触れ合える唯一の機会がペットや家畜である。動物を身近に感じられることで、わたしたちの気持ちは安らぐ。コンパニオン・アニマルと一緒にいるだけで、孤独感や疎外感、憂うつな気分、絶望感を忘れられるという人もたくさんいる。また、コンパニオン・アニマルとともに暮らし、彼らと親密な関係を築くなかで、この世には奇跡的で不思議なもの、さらには霊的なも

のさえも存在すると確信するようになった人もいる。こうした人にとって、ほかの生きものとのきずなは、子どものころから続く喜びや満ち足りた気持ちの源となっている。

人類とコンパニオン・アニマルは何世代にもわたってともに過ごしてきた。そのため彼らの健康状態や暮らし方には、動物に対するその時どきの人の感性や共感のあり方が反映している。わたしたちにとって、コンパニオン・アニマルとの結びつきは互いに高め合うものでありたいし、理解と同じくらい愛情と敬意にもとづいているのが理想だ。イヌの心をもっと理解し、イヌが欲求や意図、感情を伝える方法についての基本的な理解を深めていくと、わたしたちはいまよりもっと目配りが利くようになり、さらにはイヌとのきずなもいっそう満足のゆく有意義なものとなる。

一方で、人とイヌとの親密な結びつきを蔑む人もいる。そういった人たちは、イヌとのきずなを見当違いな感傷主義や、育児本能が誤ってイヌに向けられたものだと考えており、愛犬を失った人々の深い悲しみに懐疑的で、動物に感情や自意識、心がないと頑なに信じている。コンパニオン・アニマルを、人間の感情を食いものにしていくパラサイトだとか、同じ種類の野生動物と比べ退化して劣った生きものだと考えているのである。

長いあいだ飼い慣らされ、人に依存してきたということで、イヌが近縁関係にあるオオカミやコヨーテよりも劣っているとみなすのは、まともな科学というより無知から来る偏見の現れにほかならない。じつさい家畜化された動物の脳は、類縁関係にある野生種よりもわずかに小さいだけで（わたしたちの祖先であるクロマニヨン人と現代人の頭蓋骨の容積にも同じことが言える）、生理的な機能や心理状態は人からよい影響をたくさん受けてきていることが科学研究によって明らかになっている。イヌは、野

生の祖先と比べて恐怖心が少なく、人間を信頼し、人間とコミュニケーションをとろうとする意欲や順応性が高く、訓練しやすい。しかし、こうした変化を経るなかで、イヌはわたしたちに傷つけられやすい存在になってきた。

これは、動物、とくに飼育下で生まれ育てられた動物が、人と感情的に深いきずなを築くことができないという意味ではない。むしろ動物を飼慣らすことよって、わたしたちはコンパニオン・アニマルの心の奥深くまで近づくことができるようになった。生まれながら恐怖心が少なく、人間をより信頼するようになったおかげで、イヌはわたしたちに心を開くようになった。さらに本書で見えていくように、洞察力や推理力、先見性、共感する能力、献身的な愛情、感情の理解力といった高度な能力をも見せてくれるようになり、わたしたちに驚きや喜びを与えてくれることも少なくない。だが、こうしたすぐれた特性や才能は、かつては人類にだけあると考えられていたものだ。

こうした事実も単に、イヌも人を愛し理解していると思いたいという欲求や、飼い主がもつ勝手な想像をイヌに投影しているにすぎない、と懐疑的な人は主張する。そうすることで、わたしたちは動物の擬人化、つまり人間にだけ与えられた特質を動物にももたせるという罪を犯している、というのだ。

本書では、こうした懐疑的な考え方に異を唱えていく。なぜなら、この考えは、動物を下等な存在とみなす「種差別主義」に行きつくからだ。そこで本書では、これとは反対の証拠をたくさん紹介し、動物には高度な能力があることを証明するつもりだ。そうすることで、人と暮らしをともし、いろいろな意味で人生を豊かにしてくれるイヌが、じっさいに自意識や感受性の豊かな心をもっていること、わたしたちよりも今を生きていることを明らかにしていく。彼らと深く心を通わせることで、愛の本質に

ついで、そして自然の愛——自然であるものすべてがもつ愛——について多くを学ぶことができる。

わたしの友人であり、よき指導者であった故コンラート・ローレンツは、動物行動学の先駆的な研究でノーベル賞を受賞している。その彼が、かつて国際的な学術会議で次のように述べた。「動物を本当に研究し理解しようとするならば、何よりもまず動物を愛さねばならない」。もしわたしが、この言葉は半分だけ正しいと言ったとしても、きつと彼は賛同してくれただろう。というのも、人や動物を心から愛せるようになるには、その前にまず相手を多少なりとも理解しなければならぬし、理解が深まるほどに愛も深まっていくからである。そうしたことから本書の前半では、人と動物とのきずなにおいて不足しがちなもの、つまり愛情に関することよりも、動物の行動やコミュニケーションについて解説していく。

動物行動学者として、またイヌやネコのほか、オオカミやキツネ、コヨーテといった多くの野生動物と暮らしをともししている獣医師として、わたしにははつきりと言えることがある。それは、慣れ親しみ安心できる環境のなかで愛する者と一緒にいる動物と比べると、研究施設や動物病院にいる動物は、本来のあるべき姿をしておらず、またあるべき姿にもなれず本性を見せることもないということだ。親しみにあふれた環境でこそ、動物の奥深い性質——心や高度な能力——について多くの見識が得られるのである。じっさいにわたしは、コンパニオン・アニマルについての相談や講演、そこでの人々との交流のおかげで、イヌをはじめとするコンパニオン・アニマルの心の奥深くに接し、貴重な発見を重ねることができた。本書をとおして、それらをみなさんと分かち合いたいと思う。みなさんにとつても貴重な発見となれば幸いである。同胞である生きとし生けるものへの理解や敬意、正しい評価をうながすの

に貢献できることに、またこのすばらしいつながりを肯定し賞賛する人々と一緒に歩いていけることに喜びを感じている。

本書の後半では、コンパニオン・アニマルの健康と福祉に関する主要な問題に焦点を当てていく。そのほか、ホリスティックな予防医学についての非常に大切な情報を提供するとともに、栄養、ワクチン接種、基本的なトレーニング、よく起こる行動上の問題への対処法についてのアドバイスもとり上げていく。

第1部
イヌの心

1 イヌに意識はあるか

案内役としてのイヌ

イヌに心を開くことができれば、彼らは友人や案内役、そしてわたしたちを癒す存在になる。ネイティブ・アメリカンなどの先住民族の文化では、イヌは、人をとり巻く生態や経済活動になくしてはならない存在であり、信仰や神話の一部にさえなっている。現代では、イヌのこうした役割は昔ほど理解されていらない。それでもコンパニオン・アニマルとして、彼らはわたしたちの生活に深くかかわり続けている。けれど、イヌがそばにいないことを当たり前と思ったり、野生の類縁種の能力とくらべてイヌが劣っていると考えたりしてはいけない。多くのイヌは、野生で生存競争を生き抜き繁殖することができるのだ。人間の世話をまったく受けなくても、生まれもった能力を頼りに生きていくことができるのだ。

一方で、「文明的な」世界で暮らすどんな人にも、先住民族との共通点がある。それは、毎日何かしらの動物と触れ合っているということだ。触れ合う動物はイヌやネコの場合が多い。オオカミやヨーロッパヤマネコ、タカなどの野生動物を飼っているのはごく限られた人たちだ。これは幸運だと言える。

というのも、何千年もの長いあいだ人間のそばで生活してきたネコやイヌとちがいで、野生動物は、心も体も人間の生活環境になじむことができないからだ。オオカミとイヌの交配種にも言えることだが、野生動物は飼育されると確実に苦しむことになる。

認められたイヌの意識

動物のことを理解せず、独自の存在として尊重しないなら、わたしたちは彼らに対し、せいぜい感傷的な気持ちしか抱かないだろう。これは、わたしたちの共感する力がとても貧弱なのが原因ではないかと思う。動物の行動や心理についての理解が足りなければ、動物の身になって、彼らが何を感じているか、何を考えているか、何を欲しているか、何をしようとしているかを想像する力も乏しくなる。だが逆に、動物への理解を深めていけば、それだけ動物に共感できるようになるとも言えるのである。

動物に共感できるようになると、彼らへの思いやりと愛情が芽生える。そして、イヌは敏感にそれを察知し応えてくれる。動物への理解が深まると、わたしたちの共感する力も高まり、それによって動物との関係の質や彼らに対する愛情の形が変化していく。つまり、動物はよりかけがえのない存在となり、人間どうしの付き合いではとうてい感じられないような満足を彼らとの交流から得られるようになるのである。

ところが、動物が感情をもつことを認めない人たちがいる。彼らは、動物の行動はすべて生得的で機械的なものだと主張し、動物を蔑視する。こうした人たちは、動物がしていることや感じていることに

あえて気づこうとしない。彼らの目には、動物は感情のないロボット、単なる生物的な機械と映っているのである。生計を立てるために動物を利用する人にこうした考え方がよく見られるのは、ただの偶然ではないはずだ。

たとえば心理学者のなかには、人間の赤ちゃんの分離不安のモデルとしてサルの子を完全に隔離して育てたり、イヌなどの動物を逃げられないようにして電気ショックを与えて、これが人間の不安やうつ病の研究にとって有益なモデルになると主張したりする者がいる。けれど、これはまったく矛盾している。なぜなら、彼らはこうした実験に道徳的なまちがいはないと考え、動物は人間のように苦しまないと言っているが、その一方で、動物を使った研究は人間の感情面の問題を理解するのに役立つとも主張しているからだ。もし動物と人間の感情が似ていないのなら、このような研究で人の心理が理解できるはずはない。

動物に感情があることを否定する人は、自分の感情をも認めないのだろうか？ わたしたち人間と動物は共通の祖先をもっているのだ。動物の感情を信じないということは、動物とわたしたちとの生物的なつながりを認めないということにほかならない。そしてこうした態度は、動物に共感しなくなることにへとつながる。動物の感情を否定していると、人は彼らを思いやる気持ちをなくしていく。そして思いやりの気持ちを失うと、人は冷酷になり人間性を失う。

なかには、考え方を変えた人も少なからずいる。たとえば、チンパンジーの心臓を人間の患者（と言うよりも実験台？）に移植した世界的に有名な外科医がいる。彼は、心臓をとり出そうとチンパンジーの雄を檻から連れ出したとき、その連れ合いの雌が叫び声をあげる様子に心を揺さぶられ、そうした手

術に関わるのをやめた。またあるアメリカの猟師は、仕留めたカナダガンの雌が地上で死の苦しみにもがいているところに、つがいの雄が舞い降りて身を挺してその雌を守ろうとするのを目にした。それ以来、彼は一度も銃を手にしていない。知人の科学者に、イヌなどを使って日常的に動物実験をしている者がいたが、娘が拾ってきた野良犬を飼い始めてからというもの、彼は動物実験をきっぱりやめてしまった。そのイヌが自分に示した愛情と忠誠心に気づき、彼はこれまで実験してきた動物がもつ感受性や知能の高さを理解するようになったのだ。人づてに聞いた話だが、ほかにも捕鯨船の乗組員たちの例もある。彼らがクジラを鰯もろで仕留めたとき、仲間のクジラたちが船に体をぶつけて助けようとするのを見て、乗組員らは自分たちのしていることに嫌気がさしたという。また、クジラの研究者たちの心温まる例もある。彼らが小さなゴムボートの下を泳ぐおとなしい巨大なクジラに近づいて体に触れているあいだ、クジラはゴムボートをけっして転覆させないよう注意深く泳いでいたそうだ。

動物には単に感情があるだけではない。人間ととてもよく似た感情面での問題を抱えることもある。たとえば、動物行動療法士が「分離不安」と呼ぶ症状がある。これは、イヌでもつともよく見られる感情面の問題で、家のなかで一日中ひとりにされたときに起こる。また動物園では、たくさん動物が仲間の死や仲間からの隔離によって落ち込んでいる様子が詳しく記録されている。同じように、イヌも大好きな飼い主が亡くなったり、仲間が死んだり（第7章参照）、飼い主が旅行に出かけたさい、よそに預けられたりすると、落ち込んで食物への興味や生きること自体に対する関心を失うことがある。

いまや専門家も、動物は感情をもち、さらに感情的な問題を抱えることがあると認めている。そしてその事実、動物と彼らがあつて権利をより尊重する方向へと世のなかを動かしているのである。

* * *

ここからは、イヌの行動の基本的な側面を概観し、理解を深めていこう。理解を深められれば、より深く共感できるようになる。そうすれば、イヌは信頼や愛情はもちろん、それ以外にもたくさん贈り物を返してくれ、わたしたちの力にもなってくれるだろう。

悩みの兆候

イヌは、落ち込んだり苦痛を感じたりしたからといって、必ずしも行動が極端に変化するわけではない。極端な変化とは、跳ね回る、金切り声をあげる、身をくねらせる、乱暴な攻撃ではなく防衛的な「恐怖による噛み」をするといったようなものだが、ここでは、それよりもっと微妙な反応に注意を向けなければならぬ。そうした微妙な反応が特定の組み合わせや特定の状況下で見られる場合は、それは苦痛の明確な指標となるのである。ここでいくつか例を見てみよう。

- 1 自律神経系（無意識に身体機能のバランスを制御し、恒常性を保つシステム）の異常によって生じる変化は、肉体的または精神的な苦痛、もしくはその両方に関連していることがある。自律神経系の異常を表す指標には、よだれ（流涎）、瞳孔の拡大、心拍数の増大（動悸）、呼吸数の増加（喘ぎ呼吸）、体温の上昇、筋肉の震え（身震い）、筋肉の緊張、立毛、排尿、排便、肛門囊の内容物の排出などがある。

- 2 グルーミングなどの周期的な行動や、摂食や摂水、排泄、睡眠など生命の維持に必要な行動が乱れる。
- 3 社会的行動に問題があるときは、探索行動や遊びが見られなくなるほか、イヌどうしや人間との交流を避ける（おとなしくなる、他者を頻繁に避ける、恐れによる防衛性の攻撃をするといった行動をとる）ようになる。
- 4 異常な行動が助長される場合もある。たとえば、食事の拒否が長引き食欲不振（衰弱）や多飲（過度の摂水）になったり、極度の攻撃性や逃走反応を示したりする。また、過剰なグルーミング、自傷行為、歩き回ったり円を描くように行き来したりする常同行動が見られるほか、病気に罹りやすくなる。

転位行動と転嫁行動

イヌのほか人間を含む動物の多くは、葛藤や不安があるとき、突然ある特定の行動をとることがある。注意深く観察すれば、そうした行動から感情の状態を示す明確なサインを読みとることができる。たとえば、自分の体を引っ掻いたり、舐めたり、グルーミングしたりする行動が挙げられる。これは、ネズミやネコ、サル、人間など、さまざまな動物で幅広く見られるものだ。こうした行動は、人間の子どもがする指しゃぶりのように、自分自身による慰めという意味があり、不安を減らす働きがあると考えられている。しかし、そうした行動は常習化して強迫性障害のような症状へと発展し、さらに長期にわたる傷や伝染病の原因になることがある。